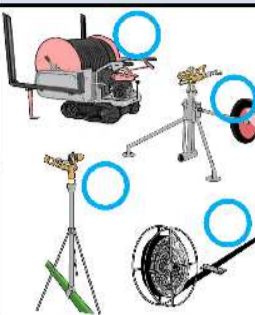
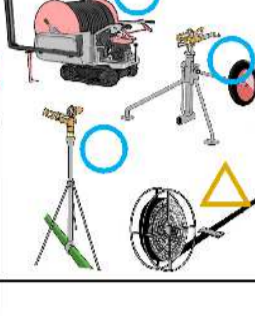
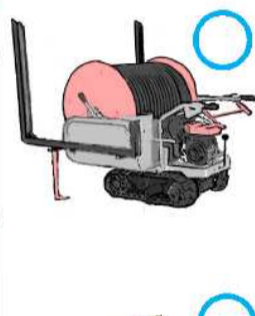

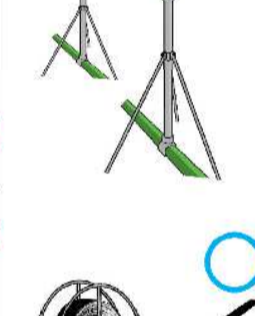
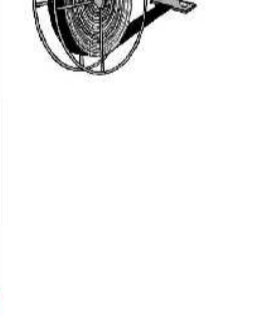

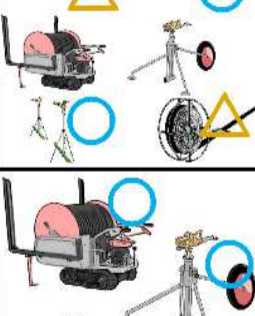

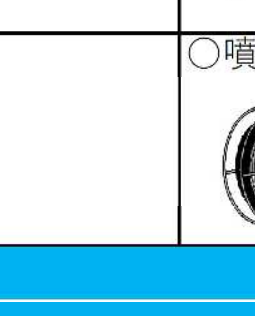


肝属中部地域の主な作物とかん水方法

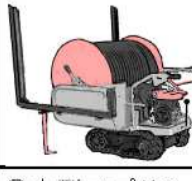
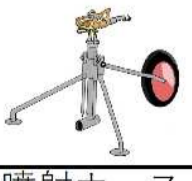


● 播種 → (定植4日前) 基礎20t ⇒ (定植4日前頃)基礎水として20t/10aかん水をする。(20mmの降雨と同じ) ● 植付20t ⇒ 植付時に20t/10aかん水をする。(20mmの降雨と同じ)

▲ 定植・植付 → 初期生育20t/14日(植付後30日迄) ⇒ (植付後30日迄の間) 初期生育時に14日に1回20t/10aのかん水をする。(20mmの降雨と同じ)

■ 収穫 → かん水しない(収穫1ヶ月前) ⇒ (収穫1ヶ月前) かん水しない。

作物と増収率	作型	かん水暦												かん水器具	特性			
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12					
さつまいも 15%↑	早掘り			植付20t														 <p>青果用、加工用、焼酎用、でん粉用として用途が多い。土壌適用範囲は広いが、土壌水分が多い場合は、いもが長く、乾燥するところや硬い土壌等では形状が悪くなりやすい。 ポイント▶ 植付時は土壌はやや湿った状態がよい。活着促進のため3日間連続かん水した方がよい。植え付け後30日間は2週間おきに20tのかん水を行う。収穫1ヶ月前は乾燥状態がよく、かん水しすぎると食味と着色不良の原因となる。</p>
	普通																	
ごぼう 27%↑	新ごぼう																	 <p>播種から、発芽初期生育までかん水を行い、乾燥させないことが重要。夏サラダごぼうでは、4~5月に乾燥状態であれば7日おきに20tのかん水をする。 ポイント▶ 単収向上には、発芽率の向上と初期生育の安定が重要。そのため、遅くとも播種4~5日前までに基礎水として30t、播種翌日に20t、その後3日降雨がない場合はさらに20t、生育初期は7日おきに20tのかん水、生育中期は10日おきに20tのかん水を行う。</p>
	夏サラダ																	
ばれいしょ 18%↑	加工																	<p>萌芽期から芋形成・肥大期には水が必要で、この時期のかん水は増収や芋個数増の効果が大きい。塊茎形成初期はそうか病に感染しやすいので、この時期のかん水は発生を抑制する。 ポイント▶ 植付前に30t、植付から2ヶ月程度は7日おきに20tのかん水を行うことで、収量増加とそうか病の軽減ができる。ただし、粉状そうか病は多湿で発生が増加するので注意する。また2ヶ月以降のかん水はえき病の発生を助長するので控える。</p>
だいこん 14%↑	秋まき																	 <p>特に水を多く必要としないが、発芽期や生育前半は乾燥を受けやすい。また、根部横痂症は、本葉3~5枚の頃(播種後15~25日)の乾燥が最も影響するため、この時期に土壌水分を確保することで被害の発生を軽減できる。 ポイント▶ 8~10月は7日おきに30t、11月~2月は7日おきに20tのかん水を目安に行う。</p>
	加工																	
にんじん 24%↑	夏まき																	 <p>発芽時期の乾燥は発芽不良の原因となるため、かん水の効果は高い。強い雨などにたたかれて土壌表面に硬く酸を通しにくい盤ができて発芽阻害されるので、土壌が乾く前にかん水して発芽させる。発芽揃後7~10日は乾燥させない。初期生育期の乾燥時のかん水は裂果の発生低減や可販収量を高める。 ポイント▶ 8~10月は5日おきに30t、11~12月は7日おきに20t、1~2月は10日おきに20tのかん水を目安に行う。</p>
	秋まき																	
ブロッコリー	夏まき																	 <p>生育全期間で適度な水分が必要で、出蕾後の乾燥は収量に影響する。 ポイント▶ 9~10月は5日おきに20t、11~12月は7日おきに20t、1~3月は7日おきに20tのかん水を目安に行う。</p>
	秋まき																	
かぼちゃ 23%↑	早熟かぼちゃ 夏かぼちゃ																	 <p>着果後20日目で果実の約80%の肥大が完了するため、この期間に十分かん水することで果実の肥大を促進できる。また、発芽率の向上や苗の活着促進のために初期にもかん水を行うと良い。 ポイント▶ かん水は基本的に午前中に実施するが、交配時期は受粉に影響のない程度に控える。果実肥大期のかん水は、7日おきに5t程度とする。</p>
	抑制かぼちゃ																	
根深ねぎ 27%↑	春まき																	 <p>乾燥には比較的強い作物であるが、育苗期の本葉2、3枚の頃は乾燥に弱いので注意する(湿害には弱いので、加湿では被害となる)。生育期に乾燥が続くと葉先が枯れるなどの生育障害が発生するため、収穫1ヶ月前までは適度なかん水が必要である。 ポイント▶ 9~10月は5日おきに30t、11月は7日おきに20t、1~2月は10日おきに20t、3~4月は7日おきに20t、5~6月は7日おきに30tのかん水を目安に行う。</p>
	初秋まき																	
葉ねぎ																		<p>播種前には必ず基礎水を行う。葉ねぎは生育段階に応じて水管理する必要があり、葉先枯症など商品性に影響がある。播種後、かん水にむらがあると発芽・生育の不揃いとなる。生育初期は土壌表面が湿る程度のかん水を行い生育を促す。 ポイント▶ 初期の乾燥は生育の不揃い、多湿は軟弱徒長しやすい。かん水は、土壌水分や生育程度に合わせて、7日おきに5~10tを目安とする。</p>
キャベツ 22%↑	晩夏まき																	 <p>育苗時期が高温乾燥となる季節であるので、育苗時期のかん水は重要である。定植後も活着を促すため、かん水を行う。生育期間すべてで適度な水分が必要で、とくに結球時期は水分要求量が多く、乾燥は肥大に影響する。また石灰欠症状をださないためにも水分が必要である。 ポイント▶ 7~9月は5日おきに20t、10月は7日おきに20t、11月は5日おきに30tのかん水を目安に行う。結球後期はかん水を控える。</p>
	初秋まき																	
さといも 32%↑	普通																	 <p>かん水の効果が高い作物であり、かん水は芽つぶれ症や裂開症の発生を抑え、いも個数の確保や肥大が良好となる。土壌の乾燥が続くと石灰欠乏が発生しやすくなる。 ポイント▶ 7~8月は5日おきに30t、9~10月は5日おきに20t、2~4月は7日おきに20t、5~6月は7日おきに30tのかん水を目安に行う。</p>
飼料作物 18%↑	ソルガム類																	 <p>かん水は、発芽促進と初期生育に効果を発揮する。計画的な作付と、目標とする収量を確保するためには、畑かん水を活用することが有効である。 ポイント▶ 春夏作は5月の播種前、生育初期に30t、秋冬作は9~11月の播種前、生育初期に20~30tのかん水を5日おき目安に行う。</p>
	イタリアンライグラス																	

◎かん水の方法 ⇒ ・途中で降雨があった場合は不足分を次の基準日にかん水し、基準量を超える降雨であった場合は次回かん水日を繰り延べる。

 <p>○ロールカー ・無風状態でかん水幅は直径32m程度である。 ・1時間で22m程度進む。(ノズルアーム角度で±1割程度速度調整可能。) ・スプリンクラー能力は時間当たり6.2mm程度であるが、移動するので積算では平均8t/10aとなる。 ※上記は、0.25MPaの使用圧力でノズルAN6.4×AN4.8mmの規格を使用した場合。</p>	 <p>○レインガン ・無風状態で散水幅は直径38m程度である。 ・持ち運びやすい一輪車付き。各器具間を導水ホースで繋ぐ必要がある。 ・かん水能力は時間当たり3.3mm程度。散水方向を全円、扇形等で調節できる。 ※上記は、0.25MPaの使用圧力(平均値)で85-PK(ノズル6.0×5.2mm)の規格を使用した場合。</p>
 <p>○中型スプリンクラー ・無風状態でかん水幅は直径29mぐらいである。 ・設置には三脚と二脚タイプがある。各器具間を導水ホースで繋ぐ必要がある。 ・かん水能力は時間当たり3.1mm程度。散水方向を全円、扇形等で調節できる。 ※上記は、0.25MPaの使用圧力で30-F(K)3(ノズル4.8×3.2mm)の規格を使用した場合。</p>	 <p>○噴射ホース ・無風状態で散水幅は両側12m程度である。 ・優しい雨のような散水ができるが、水没すると水が飛ばなくなるため注意が必要。 ・散水能力は時間当たり13mm程度。ホースの規格上0.25MPa以下で使用する必要がある。 ※上記は、0.25MPaの使用圧力でスミレイン40HD(高軟仕様)を使用した場合。</p>